

オシャベリ姫

夢野久作

青空文庫

ある国に王様がありました、夫婦の間にたった一人、オシャベリ姫というお姫さまがありました。

このお姫様は大層美しいお姫様でしたが、どうしたものか生れ付きおしやべりで、朝から晩まで何かしらシャベツていないと氣もちがわるいので、おまけにそれを又きいてやる人がいないと大層御機嫌がわるいのです。

ある朝のこと、このオシャベリ姫は眼をさまして顔を洗うと、すぐに両親の王様とお妃様かあの処に飛んで来て、もうおしやべりを初めました。

「お父様お母様、昨夜はゆうべ大変でしたのよ。ゆうべあたしがひとり

で寝ていますと、どこから這入って来たのか、一人の黒ん坊が寝床のところへ来まして、^{わたし}妾の胸に短刀をつきつけて、宝物のあるところはどこだと、こわい顔をしてきくのです」

「まあ、それからどうしたの」

と王様とお妃様は^{かあ}ビックリして姫にお尋ねになりました。

「それからね……妾はしかたがありませんから、^{たからもの}宝物の庫の

ところへ連れて行ったら、黒い腕で錠前を引き切って中の宝物をすつかり運び出して、お城の外へ持つて行ってしまったのですよ」

「なぜその時にお前は大きな声で呼ばなかった」

「だって、その宝物をみんな妾に持たせて運ばせながら、黒ん坊は短刀を持ってそばに付いているのですもの」

「フーム。それは大変だ。すぐに兵隊に追っかけさせなくては。しかしお前はそれからどうした」

「やっとそれが済んだら、黒ん坊は妾の胸に又短刀をつきつけて今度は、オレのお嫁になれって云うんですの」

「エーッ。それでお前はどうした」

「あたしはどうしようかと思っていましたら……眼がさめちやつたの」

「何……どうしたと」

「それがすっかり夢なのですよ」

「馬鹿……この馬鹿姫め。夢なら夢となぜ早く云わないのか」
と王様は大層腹をお立てになりました。

「まあ。それでも夢でよかった。あたし、どんなに心配したかしれない」

とお妃さまもほつとため息をつきました。

「オホホホホ。まあ、おききなさい。それからね、わたしは眼をさまして見ますと、まだ夜が明けしないで真暗なんでしょう。あたしは何だか本当に黒ん坊が来そうになってこわくなりましたから、ソツと起き上って次の間の女中まの寝ているところへ来て見ますと、二人いた女中が二人ともいないのです」

「憎い奴だ。お前の番をする役目なのにどこに行っていたのであらう。非道ひどい眼に合わせてやらなくてはならぬ」

と王様は又も大層腹をお立てになりました。

「それがねえ、お父様。お叱りになつてはいけないのですよ。妾もどこに行つたろうと思つて探して見ると、二人とも機織り部屋はたおに行つて糸を紡つむいでいるのです」

「何、糸を？」

とお妃かあさまが云われました。

「感心だねえ。夜も寝ないで糸を紡いでいるのかえ」

「それがまだ感心することがあるのですよ……」

オシャベリ姫はなおも前のお話をつづけました。

「あたしは、二人の女中が今頃何だつて機織室に這入つて糸を紡いでいるのだらうと思つて、ソツと鍵の穴から中の様子を見ますと、本当にビックリしてしまつたのです。だつて東の方の壁と西

の方の壁に、一列ずつ何百か何千かわからぬ程沢山の蜘蛛がズラリと並んでいるのです」

「何、蜘蛛が！　おお、気味のわるい」

と王様とお妃は一度に云われました。

「ところがそれがちつとも気味わるくないのです。東の方の壁に並んでいる蜘蛛はみんな黄金色で、西の方のはすっかり白銀色なのです。そのピカピカ光って美しいこと。そうして黄金色の蜘蛛のお尻からは黄金色の糸が出ているし、白銀色の蜘蛛のお尻からは白銀色の糸が出ているのを、二人の女中が一人ずつ糸車にかけて、ブーンブーンと撚よって糸を作っているのです。その面白くて奇麗だったこと……」

「フーム。それは不思議なことだな」

「まだ不思議なことがあるのです。その糸を巻きつけた糸巻きがだんだん大きくなって来ますと、その糸の光りで室中が真昼のように明るくなります。私はあんまりの不思議さにビックリして思わず外から……その糸をどうするの……と尋ねました」

「そうしたら何と返事をしたの」

とお妃様がお尋ねになりました。

「そうしたら、返事をしないのです」

「どうして」

「二人の女中はビックリして私の方を見ました。その拍子ひょうしに今までブンブンまわっていた二人の女中の糸巻きが急にあべこべに

まわりますと、大変です。金の糸と銀の糸がスルスルと解けて来て、二人の女中の首に巻き付きました」

「オヤオヤ。それからどうした」

「二人の女中は驚いて立ち上って、その巻き付いた糸を取ろうとして藻掻もがき初めましたが、もがけばもがく程糸がほどけて来て、手や足までもからみつきました。それで女中はなおきちがいお狂人のようになつて床の上にごろがりまわりましたが、しまいには金銀の糸がすっかり二人の女中に巻き付いて人間の糸巻きのようなつて、只うんうんうなりながら床の上を転びまわるばかりでした」

「お前はそれを見ていたのか」

「エエ。あたしはこれはわるいことをした。だってあんなことを

云わなければ、二人の女中はビツクリしなかったでしょう。ビツクリしなければ糸車をあべこべにまわさなかったでしょう。糸車をあべこべにまわさなければ、金銀の糸は女中の首に巻き付かなかったのでしょうか」

「そうだ、そうだ」

「ほんとにね」

「あたしそう思って、できるだけ早く助けてやろうとしましたが、扉に鍵がかかっていましたので、助けてやりようがありません」^と

「それは困ったな」

「それでどうしたの」

「そのうちに糸巻の糸はすっかり二人の女中に巻き付いてしまっ

た上に、壁にいた蜘蛛までも糸にくつついて女中の身体からだに引っぱりつけられましたが、女中が転がりまわりますので、蜘蛛も苦しまぎれに大層憤おこつて、女中の身体からだに巻き付いている糸をすつかり噛み切つてしまいました」

「まあ、それはよかった」

「いいえ。それからがこわいのです。糸を噛み切つた蜘蛛は、寄つてたかつて女中を喰い殺してしまいました」

「ヤア、それは大変だ」

「何という可愛想なことでしょう」

と云ううちに王様とお妃様は立ち上がって、急いで機織部屋に行こうとなさいました。

オシャベリ姫は慌ててそれを押し止めていいました。

「まあ、お父様お母様、おききなさい……それがやつぱり夢なのですよ……」

「何だ、それも夢か？」

「まあ、お前は何ておしやべりなのだろう」

と王様とお妃様は又椅子に腰をおかけになりました。そうして王様は真赤に怒ってオシャベリ姫をお睨にらみになりました。

「この馬鹿姫め。お前みたようなよいな事をオシャベリする奴はいない。この上そんなことをオシャベリしたら石の牢屋へ入れてしまうぞ」

と大きな声でお叱りになりました。

「これから本当のことをお話しなさい。ね、いい子だから」

とお母様のお妃様がおとりなしになりました。

けれどもオシャベリ姫は平気でこう云いました。

「いいえ。これからが本当なのです。今までののは今度の本当におもしろいお話をするためにお話したのです」

「何……これからが本当に面白い話だと云うのか」

「それはどんな話ですか」

と王様もお妃様もお尋ねになりました。

オシャベリ姫は又お話を初めました。

「あたしは今までお話した二つの夢がさめますと、ほんとに今夜は変な晩だと思いました。だって、寝ていれば黒ん坊が来そう

だし、女中の室^{へや}に行ったらばまた何だか変なことを見そうなので、困ってしまいました。それでしかたなしに寢床にねたまま二人の女中の名前を呼んでみました」

「ああ、それはよかった。初めからそうすればよかったのに」と王様が云われました。

「でも前のは夢ですもの。しかたがありませんわ」

「ウン、そうだったな。それからどうした」

「そうしたら二人の女中が二人ともハイと云っておきて来ましたから、妾はやつと安心をして、今お話しした二つの夢のお話をしてきかせました」

「二人とも吃^{びっくり}驚したでしょうねえ」

と今度はお妃が云われました。

「エエ、ほんとにビックリして二人とも顔を見合わせましてね。
ニコニコ笑って……それは大変にお芽出度い夢で御座います……
つて云うんですの」

「ホー。どうして芽出度いのだ」

「たからもの宝物を盗まれたり、女中が死んだりする夢が何でそんなに
芽出度いのかえ」

と王様とお妃様は又も揃ってお尋ねになりました。

「それはこうなのです。二人の女中の云うことには、この国で一番芽出度い夢は『短刀と蜘蛛』の夢と昔から言い伝えてあるつて云うんです」

「フーム、そうかなあ」

「あたしは初めてききました」

と王様とお妃様は顔をお見合せになりました。

「あたしもよく知りませんが、女中がそう云うんですの」とオシヤベリ姫は云いました。

「して、それはどういうわけで芽出度いのだ」

と王様がお尋ねになりました。

「何でも短刀と蜘蛛の夢を見るといいお婿むこさんが来ると、みんなが云うのだそうです」

「まあ、それはほんとにかえ」

「ほんとだそうです。けれども、そんな夢を見たことが相手のお

媚さんにわかれるとダメになるのだそうです。ですから二人の女中は私に、その夢のことを誰にも云ってはいけなと云いました」

「まあ、お前はほんとに馬鹿だねえ……なぜそんな大切な夢をそんなにオシャベリしてしまうの」

とお母様のお妃はほんとに残念そうに云われました。

「イイエ。お母様。あたしはお媚さんなんかいらないの。それよりもそのお話しをした方がよっぽどおもしろいの。だってこんな面白い夢を見たことは生れて初めてなのですから」

「お前はほんとにしようがないおしやべりだねえ。それじゃお前のお守の女中がその夢のことを外へ話さないようにしまし^{ほか}よう」

とお妃様が云われました。

「いいえ。構わないのよ、お母様。女中がお話しなくともあたしがお話ししますからダメですよ」

とオシャベリ姫が云いました。

王様もお妃様もおしやべり姫のオシャベリに呆れておいでになるところへ、姫のお付きの女中が二人揃って姫の前に来て頭を下げて、

「お姫様、お化粧のお手伝いを致しにまいりました。もうじき御飯になりますから」

とお辞儀をしました。

お妃様はそれを見て、

「才。お前達は昨夜^{ゆうべ}姫からおもしろい夢のお話をきいたそうだ

ね」

と云われました。

王様からこう尋ねられますと、女中は吃驚びっくりしたような顔をして顔を見合わせました。そうして二人一時にこう答えました。

「いいえ。お嬢様は夢のお話など一つも私達になさいません」

「えっ……お前達は姫から夢の話を一つもきかないのか」

と王様はこわい顔をしてお睨みになりました。

「ハイ」

「嘘を云うときかないぞ」

「嘘は申しません」

「よし。あっちへ行け」

といわれますと、女中はお辞儀をして行っていました。

王様は女中が行ってしまうと、オシャベリ姫をぐつとお睨みになりました。

「コレ……オシャベリ姫。お前はなぜそんなに嘘ばかりオシャベリをするのだ」

と王様は雷のような声で姫をお叱りになりました。

けれども姫はちつともこわがらずにこう云いました。

「いいえ。私はちつとも嘘を云いません。本当にそんな夢を見て、本当にその話を女中にしたのです。女中の方が嘘をついているのです」

と云い張りました。

けれどもお父様の王様は、もう姫の云うことを本当になさいませんでした。

「お前の云うことはみんな嘘だ。その上にそんなに強情を張つてオシャベリをやめないならば、もうおれの子ではない。この国では嘘を吐いたものは石の牢屋に入れることになっているのだから、貴様もいれてやる」

と云ううちに王様は立ち上つて、泣き叫ぶ姫の襟えりくび首をお掴つかみになりました。

お母様のお妃は慌ててお止めになつて、

「サア姫や。嘘を吐いて済みませんでしたとお云い。これから決して嘘を吐きませんとお云い。お母さんが詫わびをして上げるから」

と云われましたが、姫は頭を振って「イヤイヤ」をしながら、強情を張って泣くばかりでした。

「よし。そんなに強情を張るならいよいよ勘弁できぬ」

と王様は大層腹をお立てになって、とうとうオシャベリ姫を石の牢屋に入れておしまいになりました。

石の牢屋はお城の地の下の、真暗なつめたいところにありました。

オシャベリ姫はそこに入れられて、あんまり怖いので石の上に寝たままオイオイ泣いていましたが、いつまで経っても誰も助けに来てくれません。お母様や女中の名前を呼んでも、あたりは只シンとして真暗なばかりです。

そのうちに姫は泣きくたびれて、ウトウトねむりかけますと間もなく、

「ニャー」

と云うやさしい猫の声がきこえました。

見ると、向うの暗いところに黄金色の猫の眼が二つキラキラと光っています。

オシャベリ姫は淋しくてたまらないところでしたから、この猫を見るとよろこんで、

「チヨツチヨツチヨツ」

と呼びました。そうすると猫はすぐに姫のところへ摺^すり寄って、咽喉^{のど}をグルグル鳴らしました。

姫は猫を抱き上げてこう云いました。

「まあ……お前はどこから這入つて来たの？　この石の牢屋には鼠の入る穴さえ無いのに……お前、もし出るところを知っているのなら妾に教えて頂戴な！」

「ニャー」

「オヤ。お前、出て行くところを知ってるのかえ」

「ニャー」

「じやお前、先に立って妾をつれて行つておくれな」

「ニャーニャー」

と云ううちに、猫はもう姫の手を抜け出してあるき出しながら、「こつちへいらつしやい」と云うようにふり返りました。

オシャベリ姫は、猫が本当に牢屋の外へ連れて行ってくれるのか知らんと変に思いながら、真暗な中で時々ふりかえる猫の眼を目あてにしてソロリソロリとあるき出しますと、不思議にも狭いと思つた牢屋は大変に広くて、どこまで行つても突き当りません。そのうちに何だか野原に來たようで、穿^はいている靴の先に草つ葉が当るようです。

なおよく氣をつけて見ると、頭の上には空があつて、
処々^{ところどころ}
その雲の間から星が光っています。

「まあ。やっぱり猫は本当にあたしを助けてくれるのだよ。ただ一体ここはどこなんだろう」

と、そこいらを見まわしました。

そうするとやがてあたりが明るくなって、まだ見た事もない山や河や森や家が見えて来ると一所に、向うの雲の間から真赤なお天道様がピカピカ輝きながら出て来ました。そうしてそこいら一面に咲いている花も照らしました。

その時に気がつくと、最前の猫はどこへ行つたか、影もすがたもなくなくなっていました。

オシャベリ姫がボンヤリして立っていますと、間もなくうしろの森の中から二人の百姓の夫婦らしいものが出て来ましたが、だんだん近づいて見るとコハ如何いかに……それは人間の姿をした雲雀ひばりで、オシャベリ姫の姿を見付けるとビックリして立ち止まりました。そうして二人はオシャベリ姫を指しながら話を初めました。

「クイツチヨ、クイツチヨ、クイツチヨ、クイツチヨ」

「ピークイ、ピークイ、ピークイ、ピークイ」

これを聞くと、オシャベリ姫は不思議なことも何も忘れて、可笑しくてたまらなくなりました。

「マア……可笑しいこと。アノ……チョイト雲雀さん。ここは何という処ですか。教えて頂戴な」

と近寄って行きました。

そうすると雲雀の夫婦は慌てて逃げ出しました。

「ピーツク、ピーツク、ピーツク、ピーツク」

「ツクリイヨ、ツクリイヨ、ツクリイヨ、ツクリイヨ」

と、一生懸命に叫びながら自分の家の方へ逃げて行きますと、

その声をききつけて森の中から沢山の雲雀が出て来ました。

その雲雀たちはみんな人間の姿をしていて、お爺さんのようなの、お婆さんのようなの、又は若い人から子供までいるらしく、みんなゾロゾロと連れ出ってオシャベリ姫をすっかり取り巻いてしまいました。

オシャベリ姫を取巻いた雲雀たちは、初めはみんなだまって不思議そうにオシャベリ姫を見ていました。

けれども何もわるいことをしそうにもないので姫は安心をしまして、も一ペン尋ねて見ました。

「まあ……ここは雲雀の国なの？ あたしは人間の国から来たものだけれども、帰^{みち}り途がどっちへ行っていいかわからなくて困っ

ているのよ。だれか知っているなら教えて頂戴な」

すると、その中の一番年寄りらしい身姿みなりをした雲雀がこう云いました。

「リイチヨ、リイチヨ。リイチヨ、リイチヨ。チヨ、チヨ。チヨ
ン、チヨン」

「まあそれは何と云うこと」

「チョングリイ、チョングリイ、チョングリイ」

「グリーチリ、グリーチリ。チリロ、チリロ」

「ちつともわからないわ」

「チリル、チリル。ルルイ、ルルイ。リイツク、リイツク、リイツク、リイツク」

「つまらないわねえ……そんな言葉じゃ……」

オシャベリ姫がこう云いますと、今度は集まっていた雲雀がみんな一時にしゃべり出しました。

「ピークイ、ピークイ。ピークイ、ピークイ。クイツチヨ、クイツチヨ。クイツチヨ、クイツチヨ。クイツチヨ。チヨ、チヨ。チヨン、チヨン。チヨングリ、チヨングリ。チイヤ、チイヤ。チャルイヨ、チャルイヨ。チャルイヨ、チャルイヨ」

オシャベリ姫はあんまり八釜やかましいのでびっくりして、

「まあ。何てやかましいんでしょう。そんなにしゃべっちゃ、私の耳が潰つぶれてしまうよ。やめて頂戴、やめて頂戴」

と云いましたが、雲雀たちはなかなかやめません。なおもよつ

てたかつてしゃべりつづけます。

オシャベリ姫はあんまり雲雀たちにしゃべりつけられて、これはたまらぬと両手で耳を押えて逃げだしますと、雲雀たちはなおもしやべりつづけながら追っかけて来ます。

その上にいつどこから出て来たか、雲雀の兵隊や巡査までが繰出して来て、

「キイキイ、パイパイ」

と叫びながら、広い野原を逃げまわるオシャベリ姫を追っけまわしました。その恐ろしいこと……。

オシャベリ姫はもう夢中になつて泣きながら逃げまわつていましたが、やがて草の中にあつた深い井戸の中へ真逆様まっさかさまに落ち込

んで、そのままズンズンどこまでも落ちて行きました。

姫は又ビツクリして、

「アレ、助けて」

と叫びましたが、あんまりの恐ろしさに眼をまわしてしまいました。

けれども間もなく又気がついて見ますと、今度はいつ連れて来られたのか、立派な寢床の上に寝かされて、頭の下には柔かい枕が置いてあります。

どうしたのかしらんと思つて、そこいらを見まわしますと、又ビツクリしました。

枕元には人間の大きさ位の青蛙の看護婦が二人、黄^{きん}金色の眼を

光らして、白い咽喉のどをヒクヒクさせながら腰をかけています。

青蛙の看護婦はオシャベリ姫が眼をさましたのを見ると、すぐに立ち上って、

「キャツ、キャツ、キャツ、キャツ、キャツ」

と呼びました。

すると向うの室で、

「クン……クン」

という声がきこえまして、黒い立派な洋服を着て眼鏡をかけた大きな疣蛙いぼが、黒い皮の鞆を提げてノツサノツサと出て来ました。

その疣蛙いぼは姫のそばへ来ると、鞆から虫眼鏡を出して、姫の顔を眼から鼻から口と一つ一つていねいにのぞきましたが、おしま

いに黒い冷たい手で姫の手を掴もうとしました。姫は驚いて、

「アレ」

と云って手を引っこめますと、疣蛙は眼をパチクリさせていましたが、やがて青蛙の看護婦に、

「クフン、クフン」

と何か云いつけて出て行ってしまった。

そうすると、それと入れ違いに今度は赤い兵隊の服を着た赤蛙が先に立って、あとから最前の疣蛙が這入って来ると、立派な金モールの服を着た殿様蛙と、その奥さんらしいやさしい顔をした青蛙が這入って来ました。この殿様蛙夫婦が這入って来ると、室中にいた疣蛙も赤蛙も青蛙もみんな一時に床の上にひれ伏してし

まいました。

けれどもその中で疣蛙だけは頭を下げたばかりで、やがて殿様蛙の夫婦をつれて姫の前に来て、姫の眼や口や鼻を指さして、

「クンクンクンクン」

と何か話しますと、殿様蛙夫婦は眼をクルクルまわしてうなずいております。

姫は可笑しくなつて来ました。

「妾は今蛙の国に来て、蛙の病院に入れられているのに違いない。疣蛙はここのお医者さんで、殿様蛙はきつとここの王様で妾を見に来たのに違いない。妾の顔と蛙の顔とは大變に違うから珍らしがつているのだろう」

こう思っているうちに、殿様蛙は赤蛙の兵隊を連れてサツサと帰って行きました。

そうすると大変です。

蛙の国の王様がわざわざ病院までオシャベリ姫を見に来たということを国中の蛙はみんなきいたらしく、いろんな蛙がゾロゾロと蛙の病院の入り口から這入って来ては姫の顔をのぞき込みます。虫眼がねを出してのぞき込むものもあります。ノートブックを出して何か書き止めて行くものもあります。または写真機を出して撮影して行くものなぞいろいろありまして、中には何やらお話をしかけるものもあります。

「グレレ、グレレ、グレレ、グレレ

ケオコ、ケオコ」

雲雀の国で懲^こりていたのでさつきからだまって我慢をしていたオシャベリ姫は、もう我慢し切れなくなって吹き出しました。

「オホホホホ。ああ、可笑しい可笑しい。何ておかしい言葉でしょう」

オシャベリ姫がこう云いますと、蛙たちはビックリしたらしく、みんな顔を見合わせましたが、やがて又前よりも一層烈しくオシャベリ姫にシャベリかけました。

「グル、グル、グル

グルイレ、グルイレ、グルイレ」

「クロ、クロ、クロ、クロ

プリイ、プリイ、プリイ

プロロ、プロロ、プロロ」

と云いながら、われもわれもとオシャベリ姫をのぞきこみます。
「オホホ、ハハハハ。あたしの顔が何でそんなに珍らしいの。眼玉ばかりキヨロキヨロさして」

「ツララロ、ツララロ、ツララロ、ツララロ、ツララロ、ツララロ」

「ハハハハハハハハ。ホホホホ。あたしいやよ、そんなにのぞいちや。アレ冷たい。気味のわるい。さわつちやいけない。キタナラシイじゃないの」

「ダレイケ、ダレイケ、ダレイケ

グレイケロロ、グレイケロロ、グレイケロロ」

「コロロ、グロロ、ガロロ、ウロロ、ゲロロ、ゲロロ、ゲロロ」
といううちに、あとからあとからのぞき込んで来ます。しまいには上から上に重なり合つて、姫の寝台の上まで飛び上つて来て、われもわれもとしゃべります。

オシャベリ姫は、これはたまらぬとはね起きて、入り口から逃げ出そうとしましたが、看護婦の青蛙が両方からかじり付いて放しません。

その中^{うち}に窓の方を見ますと、窓の外はもう一面に蛙が山のように押し寄せて、あっちへ押し合いこっちへへし合い、大変な騒ぎです。おまけにそのシャベルこと。

「グレーレ、グレーレ、グレーレ、グレーレ

グレーチョコ、グレーチョコ

グルーロ、グルーロ、グルーロ

レロロ、レロロ、レロ、レロ、レロ」

「ツララ、ツララ、ツラララロ

クロラ、クロラ、クロロロラ

ゲレロ、ゲレロ、ゲレレレロ

グラ、グラ、グラ、グラ、グラ

ゲラ、ゲラ、ゲラ、ゲラ、ゲラ

ガラ、ガラ、ガラ、ガラ、ガラ」

姫は一生懸命大きな声をして、

「ちよつと待つて頂戴。そんなに押すと寝台が壊れてしまうよ。そんなにしゃべると妾の耳が破れてしまうよ」

と叫びましたが、蛙どもはなおも一生懸命にのぞき込んでしゃべります。

姫はもう死に物狂いになって、蛙たちの頭を踏^{ふみ}つけて表に飛び出しましたが、門のところまで来ると又驚きました。

オシャベリ姫は蛙のオシャベリに驚いて、蛙の病院から飛び出して表へ逃げ出しましたが、表門を出てみると外は立派な蛙の町です。そうしてその町がどこまでもどこまでも蛙ばかりで、電車も自動車も蛙で埋まったまま動かなくなつて並んでいます。

そこへオシャベリ姫が飛び出したので、今までよりも一層大さ

わぎとなつて、

「ガアガアガアガア

ワーワーワーワー」

とまるで大暴風^{おおあらし}のように騒ぎ出します。

姫は夢中になつて蛙の頭を踏みつけながら、町の外へ逃げ出しました。

野原でも林でも田圃でも何でも構わずにドンドンドンドン駆け出しますと、蛙たちはあとから押し合いへし合い追っかけます。

姫は息が切れて足が疲れて死にそうになりましたが、それでも蛙たちは追っかけやめません。

そのうちに日が暮れて、東の山からまん丸いお月様が出て来ま

した。

そのお月様をみると、オシャベリ姫はホツと一息しました。

日が暮れたらいくら蛙でも最早^{もう}追っかけて来はしまいと思いましたが、それは大変な間違いでした。

日が暮れてお月様が出ると、野原の方は一面に蛙ばかりがいるようにガアガアガアと鳴き声がして、もう足元に追っかけて来そうです。

これは大変と、姫は又も山の方へ山の方へとあとをふり返りふり返り逃げて行きましたが、そのうちに、とある高い崖の上に来ますと、眼の下に絵のような美しい都が見えて来ました。

その都はほんとに絵のように美しい都でした。

どの家もどの家も白い壁に青い屋根で、その下から青や黄色の電燈がキラキラと光っています。

その真中には大きな黒い鉄のお城がありまして、その中から紫のあかりが眩まぶしいほど光って見えました。

その上にはお月様と星が光っていて、その美しいこと……：そうしてその静かなこと……電車の音も自動車ひびきの響も人間や犬の声なぞも何もきこえません。生きたものが住んでいるのかどうかわからない位です。

オシャベリ姫はしばらくの間ボンヤリその景色に見とれていました、

「ああ、こんな静かな所にいたらさぞいいだろう。昼間オシヤベ

りをする雲雀や、夜中に鳴きまわる蛙がないから、どんなにうるさくなくていいだろう」

と思いながらフト足もとを見ますと、一本の蔦つたかずらが垂たれさが下つて、ずうつと崖の下の家側まで行っております。

オシャベリ姫は直ぐにその蔦葛を伝つて下へ降り初めました。

「もうこの国へ来たら口を利くまい。この国にはあの雲雀や蛙の口のように、もつとやっぱりあたしよりもずっとひどいオシャベリがいて、あたしをシャベリ負かしていじめるに違いない。そうしてオシャベリさえしなければきつと親切にしてもらえるに違いない」

とこう思いながら、オシャベリ姫は蔦葛にすがつて崖を降りは

じめました。

初めのうちは崖がデコボコしているので、オシヤベリ姫はちょうど段々を降りるようにして蔦葛にすがりながら降りてゆきましたが、だんだん下の方になりますと崖が急になって、しまいには全く宙にブラ下ってしまいました。姫はこわくなって引返そうとしましたが、もう引返す力が抜けてしまいまして、姫はあまりの恐ろしさに蔦葛にすがりながら泣き出しました。

その声をききつけたものか、はるか崖の下くさはらの草原へ大勢の人が出て姫の姿を見上げていましたが、崖があんまり高いので、そんな人たちがまるで蟻のように見えました。

これを見ると姫は一層恐ろしくなつて、手と足で蔓つるにかじり付

いてブルブルふるえていますと、その中^{うち}にはるか下の方から姫の
掴まっていた蔦葛を伝つて昇つて来るものがあります。だんだん
近づいて見ますと、それは黒い服にズボンを穿^はいて、白い靴に赤
い覆面をした奇妙な人間でしたが、さも軽そうに姫を引つ抱えま
すと、胴のところへ何やら小さな包みの紐みたようなものをくく
りつけますと、いきなり姫の身体^{からだ}を投げ落しました。

オシャベリ姫は肝を潰して、思わず、

「アレツ」

と叫びましたが、間もなくポカーアンと大きな音がしたと思う
と、姫の頭の上で大きな傘^{パラシュート}が開いて、折から吹く風につれて、向
うに見えるお城の方へフワリフワリと飛んで行きました。

姫は又ビックリしましたが、それでも命が助かったのでホッと安心をしました。

「まあ、今の人は何て不思議な人でしょう。初めからそう云ってくれば、こんなにビックリはしないのに。おしまいまでちつとも口を利かないなんて変な人だこと……」

と独り言を云っているうちに、風船は鉄のお城の中の広いお庭のまん中へフワリと落ちました。

姫はほんとうに安心をして、そこに敷いてある白い砂の上に降りましたが、風船はそのまま小さく畳んでポケットに仕舞しまっておきました。

そのうちに姫のまわりには鉄のお城の鉄の鎧よろいを着た兵隊さんが

沢山に集まりましたが、不思議にも一人も口を利くものがありません。だまって姫を連れて、王様の前に連れて行かれました。

王様とお妃様は、鉄のお城の中の大きな大きな鉄の室^{へや}の中の、高い高い鉄の台の上に鉄の椅子を据えて、真黒な着物を着て鉄の冠をかむって坐^すわっておりましたが、その室^{へや}中^{ちゆう}のものは鉄の壁も鉄の床も、鉄の柱も鉄の天井も、それから一パイに並んでいる大将や兵隊たちの鉄の鎧も、すっかり鏡のように磨いてありまして、その中にサーチライトのような燈火^{あかり}が紫色に輝いておりますので、そのマブシイ事……眼が眩^{くら}んでしまいそうです。

姫は何だかこわくなって、

「これから妾をどうするのですか」

ときいてみたくてしかたがありませんでしたが、みんなだまっ
ているところに又うつかり口を利くと、何だか大変なことになり
そうなので、ジツと我慢をしていますと、鉄の兵隊の一人は姫に
王様を指して、その前に行つてお辞儀をするように手真似で教え
ました。

姫は黙つてその通りにしました。

そうすると、王様とお妃様はジツと姫のようすを見ておりまし
たが、やっぱりだまつてうなずいたまま二人揃つて壇の上から降
りて来まして、二人で両方から姫を手を引っぱりながら奥の方へ
あるき出しました。

ところがその奥の方へ行く廊下の長いこと。右へ曲つたり左へ

曲ったり、梯子段を登ったり降りたり、いつまでもいつまでも続いています。そうして連れて行く王様夫婦も、あとから随したがいて来る大将たちも、やつぱりだまつて一口も物を云いません。

姫は又、

「妾をどうなさるのですか」

ときいてみたくなりましたが、やつぱり我慢をしていますと、やがて一つの立派な室に這入りました。

その室もピカピカ光って鉄ばかりで出来ておりまして、真ん中に鉄の大きなテーブルがあり、その上に大きいのが小さいのやい
ろんな鉄の壺と、それからコップや盃見たようなものが沢山に並んでいて、その真ん中あたりにある椅子に姫が腰をかけさせられ

ますと、その右と左に王様夫婦が坐まりました。あとはお伴をして来た鉄の城の大將たちが、机の四方を取かこんでズラリと腰をかけます。そうしてみんな坐わってしまうと、入口から四人の黒ん坊の女が白い着物を着て出て来まして、真中にある一番大きな鉄の壺から、みんなの前の鉄の盃へパイになるように白い牛乳のようなものを注いでまいりました。

その白い汁の芳香のいい事……。

鉄の牢屋へ這入ってから、雲雀の国から蛙の国から、この口を利かない人間の国まで来る間、なんにもたべなかつたおシャベリ姫は、もう今にも飛とびついて飲みたい位に思いました。

けれどもほかのものがみんなジツとして手を出しませんから、

姫も我慢をしていましたが、不思議にもみんなは知らん顔をしていて、ちつとも盃を手に取りとうとしません。只その中で王様が姫の前の盃を指して、「早くおあがりなさい」と云うような手真似をするだけです。

姫は困ってしまいました。

「これをこのまんま飲んでもいいのですか」

と云いたくてたまらないのですが、又思い出して、

「イヤイヤ、うっかり口を利いて非道い目に合うといけない。だまってみんなのする通りにしていよう」

とひもじくてたまらないのを我慢しました。そうして、

「この人たちはみんなきつと唾おしに違いない。そんなら耳もきこえ

ないのだから、何を云つてもわかるまい。一つオシャベリをしてみようかしらん。イヤイヤ、唾で耳がきこえないのなら何を云つてもつまらないから、やっぱり我慢をしよう」

と思ひながら、両手を膝の上に置いてお行儀よく澄ましていました。

その様子を見た王様がお妃様の方を向いて何か手真似をしますと、お妃様はうなずいてオシャベリ姫の肩をたたきました。そうしてたべ方を教えるように、姫のしている前で杯を取り上げましたが、いきなりその盃を鼻に当て、白い牛乳のような汁を鼻の穴からスーッと飲んでしまいました。

オシャベリ姫は呆れてしまいました。鼻の穴から飲むなんて、

何という変なたべかたであろうと思ひながら、お妃様の顔をよく見ますと、オシャベリ姫は思わず「アッ」と声を出しました。

お妃様の顔の鼻と眼と眉と耳とは当り前にあるのですが、口の処には何もありません。鼻の下から頤^{あご}まで一続きにノツペラボーになつてゐるのです。そうして口の代りに赤い絵の具で唇の絵が格好よく描^{えが}いてゐるのです。

オシャベリ姫は呆れてしまつて、ほかの王様や大将たちの顔をキヨロキヨロと見まわしましたが、氣が付いてみると、どの顔もどの顔も、今まで口と思つていたのはみんな絵の具で描^かいたもので、只王様や大将たちの口は大きく描^かいてあり、お妃様の口は小さく描^かいてあるばかりです。

これを見たオシャベリ姫は思わず吹き出しました。

「オホホホホ。マア可笑^{おか}しい。皆さんはどうしてそんなにお口がないのですか。どうしてそんなに片輪におなりになったのですか。鼻の穴には歯も舌も無いのに、どうして御飯や何かを召し上げるのですか。それとも、こんな牛乳みたような汁ばかり飲んで生きておいでになるのですか。オホホホホ。まあ、おもしろいこと。どうりでみなさんは、一人も口をお利きにならないのですね。お話も出来なければ歌もお歌いにならないのね。まあ、どんなにかつまらないでしょうねえ。オホホホホ。ああ、可笑しい。ああ、おもしろい。変な国ですこと。アハハハ、ホホホホホ。ああ、あたしはもうお腹の皮が痛くなりそうよ。あんまり可笑しくて可

笑しくて……」

と腹を抱えて笑いながらシャベリ続けました。

そうすると、よもや聞えまいと思っていた人々の耳に、オシャベリ姫の言葉がすっかり聞えたらしく、まず一番にお妃はさもさも恥かしそうに涙を流して室を出て行きました。

あとに残った王様は鬼のような恐ろしい顔になって、腰にさしていた短刀を抜いて姫を捕えて殺そうとしました。

姫は驚いて、

「アレ、御免なさい、御免なさい」

と言いながら、鉄の机の下に這い込んで、あっちこっちと逃げまわりますと、大勢の大將は八方から手を延ばして捕まえようと

します。それをすり抜けすり抜けしているうちに、やつとの思いすきで隙を見つけて机の下から飛び出して、廊下をドンドン逃げ出しました。

あとからは、大勢の大将や兵隊が王様を先に立てて追っかけて来ます。

姫はもう一生懸命でした。

からだ身体が小さいのを幸いに窓を抜けたり床の下をくぐったりして、やつとの思いで庭に出ましたが、この時はもうお城中の大騒ぎで、声はきこえませんが、あつちにもこつちにも兵隊が手に手に短刀を持って姫を探しているのがよく見えます。

オシャベリ姫は震え上りながら、なるたけ暗い方へ暗い方へと

木や家の隙を伝って、やがて一つの森の中に入ると、ドンドン走り出しました。

やがて、その森の向うの端のお月様のさしているところまで来ますと、そこには一つの高い高い鉄の塔がありまして、その下に小さな入り口がありました。

姫は喜んで、すぐにその中に這入ろうとしましたが、その時にヒョイと気が付きますと、その入り口一パイに網を張って、一匹の大きな蜘蛛が餌の引つかかるのを待っています。

姫はあまりの恐ろしさにあとしざりしました。

けれどもその時に、又姫がうしろをふりむいて見ますと、鉄のお城の方ではあっちにもキラリ、こっちにもキラリと光るものが

見えます。それはみんな短刀で、それがだんだんこちらの方へやって来るようです。

姫は、どうしてもこの鉄の塔の中に逃げこまなければ、ほかにかくれるところが無くなってしまいました。

姫は泣くには泣かれず、逃げるには逃げられません。前には蜘蛛が待っていますし、うしろからは短刀を持った人が追っかけて来るのです。姫はもう恐ろしくて悲しくて、ブルブルふるえながら立っております。

そうすると、はるかに高い高い塔の上から美しい唱歌の声が聞こえて来ました。

「きれいなきれいなお月様

くうろい雲にかくれても、

泣くな、なげくな、悲しむな

やがて出て来る時がある

可愛い可愛いお姫様

大きな蜘蛛にとられても

泣くな、なげくな、こわがるな

いつか助かる時がある」

それをきいたオシャベリ姫はすぐに思い切つて、鉄の塔の入り口一パイに張つてある蜘蛛の網を眼がけて飛びこみました。

ところが、その蜘蛛の網はたいそう丈夫な網で、姫の力では破ることが出来ず、かえつて姫の身体からだにへバリ付いて逃げられなく

なつてしまいました。これは大変と藻搔もがけば藻搔もがくほど、蜘蛛の糸は身体からだにへバリついて、手や足にからまつて、しまいには動くことが出来なくなつてしまいました。

これを見た蜘蛛は大きな眼を光らし、大きな口をワクワクと動かしながら姫を眼がけて飛びかかつて来ました。

オシヤベリ姫はあんまりの恐ろしさに氣絶してしまいましたが、蜘蛛の方は姫を捕まえると、そのまま沢山の糸を出して姫をグルグル巻きにして、鉄の塔の隅っ子の方へ仕舞いまして、自分は又入り口のところへ来てグルグルまわっているうちに、網をもとの通りにすっかり張り直してしまいました。

そこへ鉄の国の王様が先に立つて、沢山の兵隊が手に手に短刀

を光らせながらやってきましたが、蜘蛛の網が入口に奇麗に張つてあるのを見ますと、その中に誰も這入ったものがないと思つたらしく、そのまま行つてしまいました。

オシャベリ姫はそんなことは知りません。何だか夢のように、自分がだんだん高いところへ昇つて行くように思つていましたが、やがて気が付いてみると、自分は一つの小さな鉄の室の中の鉄の床の上に寝かされています。そうして傍に、かたわらだれか一人の男の人が心配そうな顔をして自分を見ています。

空にはいつの間にか真つ黒な雲が出て、風が吹き出していますが、折から雲の間をま出た月の光りでその人を見ますと、その人はまだ若い気高い人で、身体には美しい紫色の着物を着ていまし

たが、なおよくその顔を見ますと、その人の口は、この国の人間のように絵で書いたものでなく、本当の赤い唇なのでした。

「アレ」

と叫んで姫は飛びおきました。

「あなたのお口は本当のお口……」

こう叫びますと、その若い人は白い歯を出してニツコリ笑いしました。

「ハイ、私はこの国のあわれな片輪者です」

「まあ……あなたが片輪者ですって」

と姫は又ビツクリして尋ねました。若い人は静かな声でこう答えました。

「そうです。この国は口なしの国と云いまして、この国中の人はみんな口が無いのです。鳥でも獣でも虫までもそうなので、^{けもの}声を出すものは一つありません。雷と、雨と、霰と、風と、水の音——そんなものしかきこえないのです。それは昔この国中の人があんまりオシャベリだったからです」

「まあ……オシャベリなのにどうして口が無くなったのでしょうか」と姫はあんまり不思議なお話なのに驚いて、眼をまん丸くして尋ねました。

若い人はそのわけを話しはじめました。

「それはこういうわけです……昔、この国中の人は何でも見たことやきいたことを、ひとにお話することが好きでした。そうし

てお話の上手なオシャベリの人ほどみんなから賞められましたので、だれもかれもおもしろいお話をしよう。みんなビックリするようなオシャベリをしよう、しようと思いました。そのためにだんだん嘘をまげて話すようになりまして、とうとう嘘の上手なものがオシャベリの上手ということになりました。そうしてこの国中の人々は毎日毎日嘘のつきくらばかりして、本当のことは一つも云わないようになってしまったのです」

「まあ……それじゃみんな困ったでしょうね」

「エエ、ほんとにみんな困ってしまいました。誰の云うことも本当にされないからです。その中^{うち}にこの国とよその国と戦争がはじまりましたが、いくら敵が攻めて来たと云っても誰も本当にしま

せん。戦争の支度もしなかったものですから、この国の人は滅茶滅茶に敗けて、もうすこしで国中がすっかり敵に取られてしまうところでした」

「まあ、大変ですね。それからどうしました」

と姫は心配そうに尋ねました。

「私の先祖は代々この国の王でしたが、その時の王はこれを見て、国中の人々に『これから口を利く奴は殺してしまうぞ。鳥でも獣^{けもの}でも虫でも、声を出すものは皆、殺してしまえ』と云いつけました」

「まあ恐いこと」

「けれどもそのために国中の人々は一人も嘘をつかなくなつたば

かりでなく、何の音もきこえぬほど静かになりましたので、敵の攻めて来る音や号令の声が何里も先からきこえるようになりました。その時にこちらの兵隊はみんな鉄の鎧を着て、短刀を持って、王が指さす方へ黙って進んで行きまして、黙って敵に斬りかかって行きましたので、今度はあべこべに敵が滅茶滅茶に負けて逃げて行つてしまいました」

「まあ……よかったこと」

ときいていた姫はやつと安心をしました。

若い人はなおもお話をつづけました。

「それから後^{のち}、この国中の人々は一人も口を利かなくなりました。しまいには只ぽかんと口を開いていても、役人が遠くから見つけ

て、物を云っていたのと間ちがえて殺したりしますので、国中の人は怖がつて、ものを喰べるのにも、口を開かないように牛乳やソップなぞいう汁を鼻から吸うようになりました。そうして何千年か暮しているうちに、この国の人は口が役に立たなくなったので、だんだん小さくなって、とうとう今のようになつたくなつてしまいました。けれども全くなくなると妙な顔に見えるので、この国の人は鼻の下、昔口のあつたところに赤い唇の絵を書いておくのです」

「それじゃ、あなたは どうして口が おありになるのですか」
と姫は尋ねました。

若い人はこう尋ねられると顔を真赤にしましたが、やがて悲し

そうにこう答えました。

王子はその大きな眼に涙を一パイ溜めながら、

「この国中の人間が皆口が無いのに、私一人人口があるのについては、それはそれは悲しいお話があります。あなたはあの山くちなし梔子という花を御存じですか」

と不意に王子は尋ねました。

「ええ、よく知っています。あの晩方に大きな花を咲かせる木で、大変にいいにおいがします。花が真白なのにおいがいいので夜でもよくわかります」

と答えました。

王子はうなずきました。

「その山梔子の樹は名前を『口なし』と書くので、昔からこの国の人々が大好きでした。ですから先祖の王様は国中にありたけの道ばたに、どんな小径にも植えさせました。そうすればどんな暗い夜でも、そのにおいと白花を目あてにして道を迷わずに行かれるからです。」

……さて……私の母の妃は名をクチナシ姫とつけられました位で、まだ小さい時からこの口なしの花が何よりも好きでした。そうしてある月の夜、クチナシの白い花を次から次へ嗅ぎながらいつの間にかお城を出て、西へ西へとだんだん遠くあるいて来ました……。

ところがお城を離れれば離れるほど山梔子の花が少なくなつて、

しまいにはどちらを向いてもにおいもしなければ、白い花も無いようになりました……。そうして夜が明けますと、とうとう迷まよい子ごになって、知らない国へ来てしまいました」

「まあ……ちようど妾のようですこと……」

と姫は思わず云いました。

「それからお母様のクチナシ姫はどうなさいましたか」

王子はやはり悲しそうにして、次のようにお話をつづけました。
「クチナシ姫は、何の気もなしにその国へズンズン這入って行きますと、その国の人がだれもかれも面白そうにお話をしているのにビックリしました。」

クチナシ姫はそのお話をしているようすと、そのことばをおも

しろがつて、次から次へときいて行くうちに、すっかりおぼえてしまいました。そうして自分も話してみたくりましたが、口が利けないのでどうも出来ません。

それから歌に合わせて踊ったり音楽をやったりしているのを見て、もうたまらないほど歌がうたいたくなりましたけれども、やっぱり口を利くことが出来ません。

そのうちに大勢の子供がクチナシ姫を見つけますと、

『ヤア、口なしの女の子がいる』

というので大勢押しかけて来て、しまいには、

『片輪だ片輪だ。口なしだ口なしだ』

と云いながら、石や木の片きれをなげつけたり、ぶったり、蹴蹴った

りしはじめました。

クチナシ姫はこの国の人の乱暴なのに驚いて一生懸命逃げましたが、やがてとある山の中に逃げこみますと、子供は一人減り二人減りしてとうとう見えなくなりまして、姫はたった一人大きな池のふちへ来ました。

その池の水に姫は何気なく顔をうつして見ると、どうでしょう。せつかくお母様に書いていただいた可愛らしい口が、いつの間にか消えて無くなっています。

口なし姫はお池の水にうつった自分の顔を見て泣き出しました。『ああ、あたしにはどうして口が無いのでしょうか。外の国の人間はどうしてあんなに口を授かって、歌ったり舞ったりすることが

出来るのであろう。ああ……口が欲しい、口が欲しい』

とひとりで涙を流しておりますと、そのうちにどこからともなくクチナシの花のにおいがして来ました。

口なし姫はそのにおいを便りにだんだんやって来ますと、とうとう自分の国へ帰ることが出来ました。そうして大騒ぎをして探していた両親や家来に迎えられて無事にお城へ帰って来ました。

けれどもそれからち、口なし姫はクチナシの花を見ると涙を流しました。クチナシのにおいを嗅ぐと、いつも悲しそうにため息をしました。

『ああ。あの花さえ無ければ、私はあんなにほかの国へ行かなくともよかったのに。そうしてこんなに恥かしい、口惜くちおしい思いを

せずともよかったのに』

と思いますと、もうクチナシの花やそのにおいがいやでしょう
がありましたでした。

『ああ。あの花がなくなったらどんなにかいいだろう』

と思うようになりました。けれども国中のクチナシはなかなか
枯れません。

そのうちにクチナシ姫は大きくなって、王様のお妃様になりましたが、そのころからこの国中のクチナシの花は一つも咲かなくなつてしまいました。これはどうしたことと云っているうちに、
お妃様は玉のような一人の王子をお生みになりました。

それが私なのです」

と王子は云われました。

オシャベリ姫は、あんまり不思議なお話なのでオシャベリどころでなく、王子の顔を一心にみつめてお話をきいておりました。

王子はお話をつづけました。

「私は不思議にも生まれた時から口がありまして、オギヤアオギヤアと泣きましたそうで、そのために赤ん坊の泣き声を聞いたことのないこの国の人々は『王様のお城に化け物が生まれた』と大騒ぎを初めました」

「まあ、何と馬鹿でしょうね。当り前のことなのに」

と姫はやつと口を利きました。

「けれどもこの国では不思議がるのが当り前なのです。それで私

の父の王は私の母の妃に、その口を針と糸で縫い塞ふさいでしまえと云いましたが、私の母の妃は生れ付き情深い女ですから、どうしてそんな無慈悲なことが出来ましょう。仕方ありませんから私の口に綿を一パイに詰めて、上から繻ほうたい帯をしまして、針で縫うた傷がいつまでも治らないように見せました。そうして父の王が狩猟に行きますと、その留守に母の妃は私をつれて、地の下の窖あなぐらに連れて行って、口の繻帯を解いてやりまして、私の口に手を当あてていろいろ物の云い方を教えてくれましたので、私は十歳ばかりの時にはもう立派にお話が出来るようになっていました」

「ほんとにお母様は教えることがお上手なのですね」

「けれどもある日の事、とうとう私のオシャベリのお稽古が父の

王に見つけられてしまいました。父の王が狩に行きますと、いつも七日位帰って来ませんのに、或る時あんまり鳥や獣けものが沢山に獲れまして家来が持ち切れぬようになりましたので、三日目に帰って来ました。ところが母の妃も私もおりませんので、方々を探しますと、窖の中でお話をしている母の妃と私とを見つけました」

「まあ、大変……」

「父の王は大変に母の妃を叱りまして、すぐに私を殺そうとしました」

「まあ、こわいお父様ですこと」

「けれどもその時、私の母の妃は一生懸命で私を庇かばいまして、やっと私の命を助けてもらいました。その代り私を一生涯この塔の

上に上げて、番人の代りに大きな蜘蛛に網を張らせて、入り口を守らせることにしました。そうして毎晩一度宛^{ずつ}、たべ物と水とを蜘蛛の網のすき間から入れてもらうのですが、もしちよつとでも口を利いたり歌を唄ったりすると、その晩は食べ物が貰えないのです」

「まあ、お可哀相な」

「それで私も我慢して、それからちつとも口を利かずにいましたが、ちようど日の暮れ方のことでした。お月様が東の山からあがると間もなく、この塔の上から見まわしますと、向うの崖の途中に蔦葛につかまって一人のお嬢さんが降りて来ます」

「まあ……それじゃ、あの時私を助けて下すつたのはあなたでし

たか」

「いいえ、私ではありませんが、ただ何というあぶないことだろうと思いました。ちょうどその時、私は御飯を貰いに降りて行く時間でしたから、塔の入り口に降りて来まして、御飯を持って来た兵隊に母の妃を呼んでくれるように頼みました。そうして母の妃にソツと、あなたを助けてくれるように願いましたのです。それからあなたがこの城へお着きになると間もなく、あんな恐ろしい目に合ってこの塔の入り口までお出でになって……」

「まあ……それじゃ、私がああ蜘蛛に喰べられないようにして下さったのもあなたですな」

「ええ。あの蜘蛛は馬鹿ですから、あなたを糸でグルグル巻きに

して塔の中へ隠したのです。それを私がここまで荷^{かつ}いで来て解いて上げたのです……サアこれで私のお話はおしまいです。今度はあなたがお話しをなさる番です」

「え……私がお話をする番ですって？……」

「そうです。いったいあなたは どうしてこの国へお出でになったのですか？ あなたは いったいどこの国のおかたですか？」

姫はこう尋ねられますと、急に恥かしくなつて顔を真赤にしましたけれども、自分の生命^{いのち}を助けられた人に隠してはいけな
いと思いましたから、初めから何もかもすっかりお話をしました。

……自分がオシャベリ姫と云われたわけ……

……短刀と蜘蛛の夢を見たこと……

……それを二人のお付の女中に話したら「それは今によいことがある夢だ」と云ったこと……

……それをお父様の王様とお母様のお妃にお話しをしたけれども、二人の女中が後でそんなお話はきかぬと嘘をついたこと……

……そのためにお父様の王様がお憤りおこになつて、姫は石の牢屋に入れられたこと……

……それから猫の案内で雲雀の国から蛙の国をまわつて、どこでもオシャベリのために非道い目に合つて、やつとこの国まで逃げて来たこと……

……それから王様とお妃様に会つた話……御馳走をたべている

うちにオシャベリをして殺されようとした話……それから逃げまわつてこの鉄の塔のところまで来た話……

と、次から次へすつかりお話し申して聞かせました。

聴いていた王子はビックリしたり、感心したり、笑つたりして夢中になつて喜んでききました。そうしておしまいに、

「ああ……ああ、何という面白いお話でしょう。私は生れて初めて本当に面白いお話をききました。そうして生れて初めて本当にこんなに思うさま人間同士に声を出してお話をしました。けれども、あなたのお話の中にたった一つわからないことがあります」
「まあ、それは何ですか」

「それはその二人の女中さんです。あなたの国の人はお話をする

でしようけれども、嘘は云わないでしよう」

「ええ、嘘を云うものは一人もおりません」

「それに何だつてあなたのお付の女中は嘘を云ったのでしよう。あなたから短刀と蜘蛛のお話をきいていながら、なぜそれをきかないなぞ云つて、あなたのお父様を怒らして、あなたを石の牢屋へ入れさせたのでしよう」

「そうですわねえ。私は今でもそれを不思議と思つて居るのですよ。私の二人の女中は、今までそれはそれは忠義ないい女中で、そんな意地のわるいことをしたことは一度もありませんでしたのに……」

「不思議ですわね」

「どうしたのでしょうかね」

と二人は顔を見合わせました。

そのときにはるか下の方でバタンバタンという音につれて、

「ウーン、ウーン」

という声がきこえました。

二人はビックリしましたが、すぐに上り口からはるか下の方をのぞいて見ますと、長い長い梯子段の下のところ、例の大きな蜘蛛と、白い衣服きものを着た女の人とが一生懸命で闘っています。その女の人は見る見る蜘蛛から糸で巻きつけられてしまっているのが、窓からさし込んだ月の光りでよく見えます。

「おッ。あれは私の母の妃です。おのれ蜘蛛の奴」

と云ううちに、王子は矢のように梯子段を駈け降りて行きまし
た。

オシャベリ姫はどうなることかと見ておりますと、梯子段を降
りた王子は懷中から短刀を抜き出すや否や、たった一撃ひとつちに蜘蛛
の眼と眼の間へ突込んで殺してしまいますと、つづいて同じ短刀
でお妃に巻きついた糸をズタズタに切り破つてお妃を助け出しま
した。

オシャベリ姫はほつと安心しながら、なおもようすを見ていま
すと、お妃は嬉しさのあまり王子をしつかり犇と抱き締められました、
やがてその手をゆるめて、手真似でどこかへ逃げるように王子に
教えておられるようです。

王子は地びたへ両手をついてお礼を云いました。

そのうちに、お妃は涙を流しながら王子と別れて、表の方へ出て行かれました。

それを見ていたオシャベリ姫は、急いで梯子段を降りて、王子の傍に行こうとしましたが、その時は何だかお城の中が急に騒々しくなったようで、風の音のきれ目きれ目に沢山の人の足音がするようですから、姫は外をのぞいて見ますと、大変です。

沢山の兵隊が手に手に短刀を持って、この塔の方へ押しかけて来るようです。

これを見た姫は思わず上から叫びました。

「王子様、大変ですよ。大勢の兵隊が攻めて来ますよ」

王子はこれをきくと、すぐに表に走り出て見ましたが、たちま忽ち塔の中に駆けもどつて、右に左に折れまがつた梯子段を、一つのぼつては引き外してはず投げおろし、二つのぼつてはつき落して、塔の上まで昇つてくるうちに、階段が一つも無いように下の方へ落ちてしまいました。

そこへ大勢の兵隊が攻めかけて来ましたが、梯子段が落ちていたので登ることが出来ません。しかたなしに八方から鉄の塔を取り巻いて、ヒューヒューと矢を射かけましたが、あまり塔が高いのでみんな途中まで来て落ちてしまいました。

王子はそれを見ながら、あまりの恐ろしさにワナワナふるえている姫にこう云いました。

「この兵隊どもはみんな、この国の風下の町々から来た兵隊です。さつきから私たちがお話した声が風下の町や村へすっかりきこえたそうで、この塔の上に魔物がいるというので、父の王に早く退治するように云って来たのです。父の王も母の妃も、そのお話をしたものがあなたと私で、魔物でも何でもないとはいよく知っていたのですが、昔からこの国ではオシャベリをしたものは殺すことになっているのですから、殺さないわけに行きません。すぐお城の中でも兵隊を繰出すように云いつけましたので、母の妃は心配して、早く逃げるように知らせに来たのです。けれども悲しいことに口を利くことが出来ないで、しかたなしに中に這入ろうとしたために蜘蛛の巣に引っかかってあんな目に合ったのです」

「まあ、ほんとに御親切なお母様ですこと」

とオシヤベリ姫は涙を流しました。

「けれどももう遅う御座いました。この塔はもう八方から兵隊に取巻かれて逃げることは出来ません。只逃げる道が一つあるきりです」

「えっ、まだ逃げる道があるのですか」

「ありますとも。あなたはさつき崖から飛び降りる時に持つておられた落^{パラシュート}下傘を持つておいででしょう」

「あつ。持つています、持つています」

「それを持つて飛げるのです」

と云いながら、王子は鉄の塔の絶頂の窓のところからお城の方

を向いてこう叫びました。

「お父様、お母様、私が変わるう御座いました。よけいなことをオシヤベリして大層御心配をかけました。私はこれから姫と一所によその国へ行きます。けれどもこれから決してオシヤベリはしません。本当に見たりきいたりしたことでも、よけいなことはお話しをしないようにいたしますから、どうぞ御安心下さいますように。さようなら、御機嫌よう」

こう云ううちに王子は、塔の床の上に手を突いて、涙を流しながらお暇いとまご乞いをしました。

オシヤベリ姫もだまって涙をこぼしながら、手を突いてお暇乞いをしました。

そうして二人は落下傘パラシュートの紐をしつかりと掴んで、塔の上から下を目がけて飛び降りました。

二人の身体からだはやがて落下傘パラシュートのおかげでフンワリと空中に浮かみました。それと一所に烈しく吹く風につれて、大空高く高く高く舞い上がりましたが、その中に雨うちがバラバラと降り出しました。

そうすると又大変です。落下傘パラシュートは紙で作ってあつた物とみえまして、見る見るうちにバラバラに破れてしまいましたからたまりません。

二人は抱き合つたまま流星のように早く、下界したの方へ落ちて行きました。

「アレツ。助けて」

と姫は思わず大きな声で叫びましたが、その自分の声に驚いて眼をさしますと、どうでしょう。今までののはスツカリ夢で、姫はやっぱり自分のお城の石の牢屋の中に寝ていたのでした。

姫はどちらが夢だかわからなくなってしまうました。

あんまりの不思議さに、立ち上って石の牢屋の四方を撫でまわしてみましたが、四方はつめたい石で穴も何もありません。上方へ手をやってみますと、天井もすぐ手のとどくところにあります。したが、そこにも抜け出られるようなところが一つありません。あんまりの奇妙さに、姫はボンヤリして、石の床の上に坐わっていました。

すると間もなく向うにあかりがさして、お父様の王様と二人の

兵隊が見えまして、牢屋の入り口を外から開かれました。

お父様は思いがけなくニコニコしながら、こう云われました。

「これ、オシャベリ姫。お前の夢は本当になったぞ。今までお前があんまりオシャベリなために誰も婿に来る人が無かったのに、きよう不意に隣の国の第三番目のムクチ王子様が、お前の婿になりたいと云ってお出でになった。今からお引き合わせをするのじやから早く来い」

と云ううちに、姫を牢屋から引き出して、お城へ帰られるとすぐに、二人のお付の女中に姫を立派にお化粧させるように申しつけられました。

二人の女中は姫の無事な姿を見ると、嬉し涙をこぼしながらお

化粧のお手伝いをしました。そうして両方から姫の手を引きながら御両親の王様とお妃様の前に連れて行きました。

姫は狐につま抓まれたようになって手を引かれて来ましたが、父の王と母の妃の前にいるムクチ王子の姿を見ると思わず、

「アレッ。あなたはあの王子様」

と叫びました。ムクチ王子の姿はもう些すこし前夢に見た、あのクチナシ国の王子にすこしも違わなかったのです。

ムクチ王子も姫を見るとニツコリと笑われました。そうしてこう云われました。

「ビックリなすったでしょう。私も本当は不思議に思っているのです。私は昨夜不思議な夢を見ました。その夢の中で私はクチナ

シ国王の一人子と生れましたが、生れた時から口があるためにいろいろ両親に心配をかけましたあげく、オシャベリ姫と一所に鉄の塔から逃げ出しました。その時に姫からきいた話によりますと、姫は蜘蛛と短刀の夢を見たとお父様とお母様に云ったのを、お付の女中が嘘だと云ったために、石の牢屋に入れられたということでした。それから眼がさめて考えてみますと、オシャベリ姫というお名前はあなたの外にありませんから、心配になりました、すぐに馬に乗ってこのお城へ駆けつけてみますと、私の夢は本当で、あなたは石の牢屋に入れられておいでになることをあなたの御両親からききました。それであなたの夢が嘘でないことを申し上げてお許しを願ったのです」

このお話をきいていた姫は、夢が本当なのか本当が夢なのかわからなくなってしまうました。その時にお父様の王様はこう云われました。

「姫よ。おまえがあんまりオシヤベリをするから本当の話でも嘘と思われるのだ。これからお前はオトナシ姫と名を更^かえろ。そうして決していられぬことをオシヤベリするな」

こう云われますと、姫は真赤になって恥かしがりながら、

「私がわるう御座いました。これからは決しておしやべりいたしません」

とお詫びをしました。

王はそれから二人の女中にこう云われました。

「お前たちは姫から短刀と蜘蛛の話をきいたのだろう」

二人の女中は顔を見あわせて真赤になりましたが、やがてこうお答えしました。

「ハイ。たしかにそのお話をききました」

「それに何だつてきかないなぞと嘘をついたのだ」

こう尋ねられますと、二人の女中はなおなお恥かしそうにしながらこう答えました。

「ハイ。蜘蛛と短刀の夢を見ると、きつといいお姫様がお出でになる。けれどもそのことが相手のお姫様のお耳に入るとダメになる、と昔から申し伝えてあります。それで私共は、お姫様によいお姫さまがお出でになるように、わざと嘘だと申しましたのです」

王様もお妃様もムクチ王子もオシャベリ姫のオトナシ姫も、二人の女中の忠義心に感心をしておしまいになりました。

ムクチ王子がオシャベリ姫のオトナシ姫のお婿さんとなって華々しい御婚礼があつたのは、それから間もないことでした。

そのときに二人の女中は王様から沢山の御褒美をいただきました。

そうして死ぬまで忠義にムクチ王子とオトナシ姫に仕えました。

青空文庫情報

底本：「夢野久作全集」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年5月22日第1刷発行

※底本の解題によれば、初出時の署名は「かぐつちみどり」です。

入力：柴田卓治

校正：江村秀之

2000年5月17日公開

2006年5月3日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

オシャベリ姫

夢野久作

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>